2012（平成 24）年６月

NPO 法人日本ビオトープ協会

第４回ビオトープ顕彰受賞作品の紹介

◇顕彰委員会副委員長の講評：『ビオトープフォーラム in 盛岡 2012』（６月８日）にて

「顕彰委員会を４月に開催いたしました。全国各地からビオトープ大賞にご応募いただきまして、ありがとうございました。

顕彰委員会といたしましては、ビオトープに関して、一つはそのビオトープをつくったコンセプト・考え方・理念がどういうものであったのかということが、まず検討の材料とされています。またそのコンセプトをどういう形で生かすのか、施工し管理するかに関しても検討いたします。この点に関しては、特にそれを持っているところだけではなくて、施工する方々、それを維持管理する方々など、どういう形でかかわっていかれるか、いろいろな形での『協働』として、実質的になされているかということが大切なことです。その背景にありますのは、ビオトープというのはその時代時代、場所によってやり方が違う、同じものでも扱い方が違っていることを含めて、いかにそれが学習の場であったりあるいは福利厚生の場であったり、地域共生の場であったり、そういうものとして位置づけ・活用されているかという部分も、大きなポイントの一つとして、我々は評価をいたしました。そして最後には、今回のものでは 15 年近い年数、維持管理・活用されている例もございますが、完成したというものはビオトープ自体にはたぶんないと思います。毎年毎年工夫をして改良していく、そしていろいろな使い方を見出していく、それが重要だと思います。そういう視点から、我々は顕彰委員会として、今回の表彰を決めました。いずれのビオトープ関係の事業に関しましても立派なものと考えております。今後ともこの表彰を糧とし、地域の環境共生にご貢献いただければと存じます。」

（横浜国立大学学長　鈴木邦雄選考副委員長）

◇ビオトープ大賞

名　称	岩手県立大学第一調整池
受賞者	公立大学法人岩手県立大学

【テーマ・概要】

平成10 年の開学と同時に竣工した調整池で、学内に4つある調整池で唯一常時湛水である。大学正門近くに立地し、周囲は適度なアンジュレーションを持たせた緩斜面緑地に囲まれた窪地であり、一般的な大学利用者は周囲の斜面上から池を見下ろす。雨水と学内の排水処理施設処理水が流入する構造になっており、多少富栄養化の傾向が見られるが、その特徴を環境学習に役立てている。池の周囲にはエコトーンが形成され、多くの生物をはぐくむと共に、少し離れた高所から見る水辺環境として、優れた景観を作り出している。

【整備方針と管理手法】

池の周囲には浅水部を設け、植物が定着しやすい形態に設計された。周囲の斜面上から見た景観に配慮する方針の基、水辺域においてはある程度遷移に任せる形で管理が行われた。その結果、木本も含む多様な植生が形成されると共に、多くの野鳥や水生生物が来訪する環境が形成された。さらに、周囲の斜面は、人のアプローチが多い西側を中心に定期的な刈り取りを行う一方、東側斜面は刈り取り頻度を落とし、ある程度草丈の高い草本類が優先させることで、自然、半自然、人工のバランスが取れた景観を形成した。東側には、近隣の幼稚園児と共にコナラなどの実生を毎年植栽し、調整池から隣接する森林公園とのつながりを意識するなど、長期的な視野に立った管理を進めている。

【様子】

環境調査実習に活用

近隣の幼稚園児との地域性種苗の植樹

◇学校ビオトープ大賞

名　称	ネイチャーワールド・みんなのころも川
受賞者	愛知県豊田市立挙母小学校　株式会社鈴鍵

【テーマ・概要】

このビオトープは、平成12年度市街地にある挙母小学校の児童のために、市の河川課が力を入れ、矢作川から注水し造成されたものである。しかし最初の1年は樹陰も無く、水も草も枯れ、思うように自然は育たなかった。3年を経て、生物部の児童と担当する教師たちの努力の甲斐あり、滝から流れ落ちるせせらぎの蛇行する小川は、ようやく草も茂り、オイカワ・アブラハヤ・ヨシノボリ・ドジョウ等が棲息するようになった。現在は、樹木も生い茂り、児童たちが休み時間に遊び、授業で観察する自然観察園となっている。

【整備方針と管理手法】

ビオトープの整備と管理は、教師と児童によって行われている。児童の話し合いで、「中では走らない」「魚や昆虫をいじめない」「川に石や木を投げ入れない」などのきまりを決めた。教師は校務主任と担当教師が中心になり、整備・管理をしている。周りの柵が朽ちると新しいものに付け替えたり、外来種の繁茂を防ぐために草刈りをしたりして、自然観察園としての環境を保っている。また年数回、生物部の児童と一緒に、川に堆積した泥をかいだし川をきれいにしている。業者や地域の有識者にお願いして、植物の管理方法を学び、児童と一緒に実践し、ビオトープに生き物が棲みつく環境を作っている。

【様子】

清掃活動

平成 24 年 5 月現在のビオトープ

◇顕彰委員長賞

名　称	兄弟社村ビオトープ
受賞者	近江兄弟社小学校

【テーマ・概要】

テーマ：『北ノ庄沢の自然を取り戻そう』

昔、北ノ庄沢は沢山の蛍の棲む場所として有名だった。今は土地は荒れ放題で、ゴミがいっぱい捨てられる所になってしまった。4年生が環境学習を学ぶ中で、私たちの力で生き物がいっぱい集まる場所にならないかと話し合ったことから、活動が始まった。学校近くに在住の日本ビオトープ協会前会長の西川勝氏のアドバイスをもらい、保護者とともにビオトープを作ることになった。

【整備方針と管理手法】

2001年、沢にある植物を植え付けた。ヨシが生えてきたので、冬場にはヨシ焼きを行なった。

より自然に近い、風土にあった湿地となっている。

生徒・教師のOB・PTAらにより取り組み、畑づくりなども行い、コミュニケーションやリフレッシュの場となっている。また生き物調査を続けたりと、学習の場としても発展している。

【様子】

池

田植え

◇技術特別賞

名　称	県立成東高校ビオトープ庭園
受賞者	千葉県立成東高等学校　一般社団法人千葉県造園緑化協会

【テーマ・概要】

このビオトープは、一般社団法人千葉県造園緑化協会が、県立成東高校から、理科や環境教育での活用や自然環境や緑化に関する研究者などの人材育成に役立てるため校内にビオトープを整備したいので協力して欲しい旨の要請を受け、社会貢献活動の一環として、ビオトープづくりのノウハウの指導や施工支援を行った。校内に約４０メートルのせせらぎとその途中に湿地や池を配置した“ビオトープ庭園”を整備し、高校における環境教育の推進に貢献した。

【整備方針と管理手法】

整備の基本方針は、①校舎中庭にある樹木園の再活用②地域の稀少動植物の保全などとし、高校の教育現場での活用のみならず、地域住民にも環境やビオトープの意義などについて考える場を提供することとした。実際の施工は、会員企業の技術習得研修として位置づけ参加者を募集、樹木の移植、掘削、防水シート張り、盛土、石組みなどについて、約２週間延べ８０名が参加し行った。併せて、この“ビオトープ庭園”を教材として、成東高校生徒や若手造園技術者を対象とした「ビオトープ研修会」の開催や、ＰＴＡ研究集会において事例発表を行うなど、環境や緑化推進の普及啓発に役立てた。

【様子】

全景

ビオトープ研修会

◇地域貢献賞・CSR 特別賞

名　称	横浜ビジネスパーク
受賞者	野村不動産株式会社　株式会社カジオカＬA

【テーマ・概要】

野村不動産グループでは、分譲マンションやオフィスビルにおいて、植栽および既存樹による緑化計画や植栽の維持管理を積極的に実施している。その中で、環境に関する取り組みの一環として2008年6月より毎年、横浜ビジネスパークにおいて「ホタルがすむ街づくり」をキャッチフレーズに、横浜国立大学の共催をはじめ、NPO日本ビオトープ協会の後援、区役所、YBP内の企業、地域ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ団体、地域住民の協力を得て、地元の人達と共に楽しみ、学べるビオトープや、田んぼ等を設置したり、ホタルを鑑賞できる特設ブースの設置、色々なイベントを通し、自然と人間との係りを、心と体で学び考える場を提供している。

【整備方針と管理手法】

近所の住民らが散策するなど、労働の場と憩いの場を合わせた施設になっている為、見て楽しめる様、流れ、池、湿地を組み合わせた観察し易い高床式ビオトープにし、水の中の魚を観察出来る窓を設けたり、四季折々咲く花や木を植えている。又、魚は県内水試より借り受けた地元鶴見川水系のメダカやホトケドジョウを放流し、循環水ながら自然繁殖し数を増やしている。年に３回地元小学校２校の環境学習の課外授業としてビオトープ観察会を開催。管理は月に１回程度除草や、支障枝の剪定、清掃等をビオトープアドバイザーにより行なっている。日当りの良い玄関脇には田んぼを設置し、地元小学5年生約80名と、5月の田起しから、田植え、刈り取りを行い、11月には収穫祭として地元自治会ボランティアらに協力してもらい餅つきをして、農業の大切さや、楽しさを学んでもらっている。指導は保土ヶ谷区で唯一稲作りをしている方へお願いしている。水管理は自動灌水装置による。

【様子】

放流会

収穫祭

◇地域貢献賞

名　称	うねべ里山
受賞者	株式会社加納造園

【テーマ・概要】

『環境起業と地域ボランティアの協働による里山再生』

うねべ里山は、利用者の多い都市公園に隣接し、雑木林と竹林が残る地域で数少ない里山であった。竹林が繁茂し、粗大ごみの捨て場となっていたが、平成19年より地域ボランティアグループと協働で里山再生に取り組んできた。環境企業として、里山づくりへのアドバイスをはじめ、人材・機材を提供し、人々が活用できる里山づくりと共に日本の原風景を取り戻すことを目指した里山再生である。

【整備方針と管理手法】

民間地であり、地権者の理解をいただき、里山の再生を目指し、整備してきた。年間 8 回程度の竹林、雑木林の整備・草刈などを、地域ボランティアグループや社員などと共に行っている。環境企業として、ヤブカンゾウ、ヒガンバナ、ヤブコウジなどの地被植物保護についてのアドバイスと共に、人材・機材なども提供し管理をしている。また、巨木への樹名板の設置、野鳥の生息環境にも配慮し適度な竹林を残し、地域の人々、特に子供たちの環境学習の場になることも目指している。

【様子】

協働作業による再生整備（竹林間伐）

松丸太・チップ敷による遊歩道設置

◇環境教育賞

名　称	三南トープ
受賞者	静岡県立三島南高等学校　特定非営利活動法人グラウンドワーク三島

【テーマ・概要】

テーマ：『里山の未来～そして生命は続いていく～』

平成15年校舎東側に湧水があったためビオトープが設置させたが、グラウンド拡張のため埋め立てられた。平成19年に現在の北側の観音川沿いに2度目のビオトープが設置された。長さ約15m、幅約3～5m、深さ50mのひょうたん型をしており、池には、静岡県東部では絶滅危惧種IA類に指定されているメダカが棲んでいる。池周辺には、コナラやアラカシなどの樹木や近くの休耕田から移植したオオジシバリなどの草本が植えられている。

【整備方針と管理手法】

学校職員、生徒及びPTAなどの学校の外郭団体、グラウンドワーク三島、地域住民などで管理している。塀がなく、舗道沿いにあるため、景観を考え、定期的に草刈を実施。月2回、継続的に水質検査を実施している。鉄分が多い井戸水を利用しているため、週2回浄化装置の洗浄をしている。ビオトープの老化を考え、4年目の平成23年8月に池から水を抜き、堆積した泥を除去した。木や竹を材料にしたベンチなどは、間伐材や放竹林のモウソウチクを利用してリニューアルしている。

【様子】

全景

観察会

◇環境学習推進賞

名　称	国営備北丘陵公園　ひばの里　ビオトープ
受賞者	株式会社カジオカ L.A

【テーマ・概要】

『ビオトープ有効利活用の8年間の記録』

ビオトープは作った時がスタートだが、多くの場合、作った後少しずつ荒れて利用がされていない所が多々ある。備北丘陵公園では、2003年に4つの小学校の生徒が作った。その後8年にわたり、有効利活用がされている。年3回のビオトープ観察会、年1回の学んだことの発表会を継続している。「楽しくなければビオトープじゃない！」と「センス・オブ・ワンダー」に重点を置き、取り組んでいる。

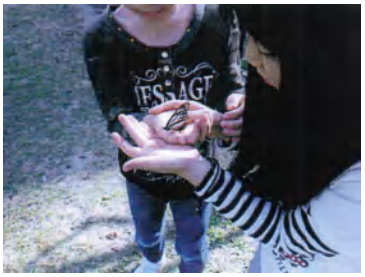
【整備方針と管理手法】

ビオトープ作り：生徒が中心となり、どんなビオトープを作るか、ビオトープで何をするかなどを考え、自分たちの手で作った。

有効利活用：生徒たちにとって「楽しく学ぶ」「なぜ？どうして？」ということに重点を置いた。また、ビオトープ観察会は、総合学習の一環であり、学習という観点も大切にした。

【様子】

観察会



観察会・放蝶